# 高齢者がウェルビーイングを保てる社会に向けて
## ―地域社会とのつながりから考える人生満足度―

明　石　留美子

### 1．高齢者人口の増加とウェルビーイング

社会の高齢化は先進国のみならず開発途上国でも進行し、世界レベルで対策が急がれている。日本では、2013年９月現在、65歳以上の高齢者の人口は3,186万人となり、総人口に占める割合も25.0％に達し、それぞれ過去最高を記録した（総務省統計局, 2013）。日本では、４人に１人が高齢者ということになる。高齢者の数は、団塊世代が高齢期に入り始めた2012年に3,000万人を上回り、将来推計では2020年には3,612万人へと増加すると予測されている。その後、緩やかな増加期を迎えるが、2042年には第二次ベビーブーム世代が高齢期に入ることから、高齢者数は3,878万人のピークに達すると推定されている（国立社会保障・人口問題研究所, 2012）。以後、高齢者人口は減少傾向に転じ、2060年には3,464万人に減少すると予測されている。しかし一方で少子化も進行することから、同年の総人口における高齢者人口の割合は39.9％となり、2.5人に１人が高齢者となることが見込まれている。このように急速に少子高齢化していく社会のなかで、高齢者がどのようにウェルビーイングを保ちながら生活していくことができるのかを考えることは、社会にとって重要な課題といえる。

人々は高齢期に入ると、身体、認知、社会的機能などの様々な面で衰えや喪失を経験する（Fung, 2005; Masoro, 2001; Moos, Brennan, Schutte, & Moos, 2006; Qualls & Abeles, 2000）。高齢期の多くの人々にとって獲得するものが減少していく一方で、失うものは増加していく（Freund & Ebner, 2005）。そのため高齢期には、自立生活が困難となり、他者への依存度が高まる人々が増加する（Smith & Baltes, 1998）。また、年歳を重ねていくなかで、ストレスフルなライフ・イベントに遭遇する可能性も高まる。こうしたことが高齢期の特徴であるなら、高齢期に突入した人々が感じるウェルビーイングは減退していくのであろうか。人々は、人生において様々な困難を経験する。しかし経験を重ねていくなかで、遭遇する困難への対処法を習得し、心理的にも困難に適応していく方法を身に付ける（Fung, 2005）。したがって、高齢となっても人々がウェルビーイングを維持し、さらには高めていくことも十分に可能であると考えられる。

人々は、中年期から高齢期へと移行するなかで、社会や家庭での責任、生活のあり方、遭遇する課題などにおいて様々な変化を経験する。こうした変化は、ウェルビーイングに影響する要因も年齢に応じて変化していくことを示唆する。

本研究は、東京都港区Ａ地区に在住する高齢者のウェルビーイングを人生満足尺度によって測定し、彼らの人生満足度を予測する要因を見出すことを目的とする。この目的に向けて、Ａ

地区の高齢者を前期高齢者（65－74歳）および中・後期高齢者（75歳以上）に分類し、高齢期に突入直前の後期中年期（55－64歳）の人々と比較する。したがって、第１に、前期高齢者、中・後期高齢者の人生満足度は、後期中年者と比較して劣っていないのかを分析し、第２に、前期高齢者、中・後期高齢者、後期中年期の人生満足度を予測する要因を見出す。本研究ではウェルビーイングの予測要因を地域社会とのつながりに焦点を当てて分析し、社会参加とソーシャルサポートがウェルビーイングにどのように関係するのかを探求する。

## ２．ウェルビーイングの概念

高齢者のウェルビーイングは、これまで様々な概念を用いて研究されてきた。ウェルビーイングについて研究者間で合意されている定義は存在せず、そのため、主観的ウェルビーイング（Diener, 1984; George, 1981など）、サクセスフル・エイジング（Rowe & Kahn, 1998）、生活の質（Lawton, 1999など）、人生満足度、ポジティブ感情・ネガティブ感情（またはネガティブ感情がないこと）、幸福感、自尊心（Chen, 2001; Hillerås, Aguero-Torres, & Winblad, 2001; Khalil & Okun, 2002; Pavot & Diener, 2003; Pinquart & Sörensen, 2001; Westerhof & Barrett, 2005）など、様々な概念枠組みで研究されてきた。

本研究では、高齢者のウェルビーイングを、人生に対する認知的評価を測る人生満足尺度から測定する。人生満足度とは、ウェルビーイングに関する主観的な判断を示す概念で、一時の感情によって左右される一時的な判断を示すのではなく、幅広く安定的な現象を説明する概念である（Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985）。日本語版は確立されていないものの、オリジナルの英語版尺度では、正当性と信頼性に関するエビデンスが確認されており、様々な年齢集団に用いることができ応用性がある。以上のことから、本研究では、和訳した人生満足尺度を用いて分析する。

## ３．研究方法

本研究は、2010年に明治学院大学社会学部付属研究所が開始した特別推進プロジェクト「現代日本の地域社会における＜つながり＞の位相―新しい協働システムの構築にむけて―」の一環である。特別推進プロジェクトでは、東京都港区の住民を対象に、郵送によるアンケート調査を行った。本研究では、このデータ（N=2,645）から、港区 A 地区に在住する55歳以上（2010年現在）の住民をサブサンプル（55－99歳、n=746）として抽出し、さらに後期中年者（55－64歳、n=252）、前期高齢者（65－74歳、n=275）、中・後期高齢者（75－99歳、n=219）の３つの年齢別グループに分類して分析を行った。本研究では、まず以上の３つの年齢別グループのウェルビーイングを比較し、次に各グループのウェルビーイングの予測要因を分析した。

前述のように、本研究ではウェルビーイングを人生満足度によって説明する。すなわち、人生満足度を従属変数として設定し、Diener・Emmons・Larsen・Griffin（1985）による Satisfaction with Life Scale（SWLS）の日本語訳を用いて測定した。SWLS の日本語版が確立していないため、本研究では SWLS を和訳し質問票に加えた。したがって本研究で使用した SWLS の日本語訳は、信頼性および正当性が確立されたものではない。

SWLS は、人生満足度について、１）大体において私の人生は理想に近い、２）私の人生はすばらしい、３）私の人生に満足している、４）これまでの人生の中でこうしたいと思った重要なことはなしとげてきた、５）人生をやり直せたとしても変えたいことはほとんどないの５つ

の項目について、調査対象がどのように判断しているかを測定する尺度である。回答者は、以上の５項目について、１（まったくそうでない）～７（まったくそうだ）の数字のうち、いずれかを選択する。５項目の総合点より満足度を計測するが、31－35が非常に満足、26－30が満足、21－25がやや満足、20がどちらとも言えない、15－19がやや不満足、10－14が不満足、５－９が非常に不満足として分析される。したがって、35点が最も満足度の高い状態を表す。

以上で説明した従属変数、すなわち人生満足度は、調査対象の属性と地域社会とのつながりを独立変数として、因果関係を分析した。対象者の属性としては、性別、国籍、学歴、収入、生活形態（独り暮らし）、住居形態（持ち家）、港区在住年数を分析した。地域社会とのつながりについては、趣味・稽古のサークルや団体への参加、スポーツ・サークルや団体への参加、学習活動を行うサークルや団体への参加、政党・労働組合への参加、（高齢者・児童に関わる）ボランティア活動、コミュニティ活動（自治会・町内会、地区社協・民生委員、PTA などの学校に関する活動、商店会）、ソーシャルサポートで測定した。ソーシャルサポートについては、話し相手（悩みやグチやを話せる人）の人数で測定した。

## ４．結果

本研究の統計解析には IBM SPSS Statistics, Version 21を使用した。各年齢グループの属性（表１）は一元配置分析（年齢、港区在住年数）および$\chi^2$検定（性別、国籍、学歴、世帯収入、生活形態、持ち家）で分析した。地域社会とのつながり（表２）も同様に、一元配置分析（話し相手の人数）および$\chi^2$乗検定（ボランティア活動、趣味・稽古、スポーツ、学習、コミュニティ活動、政党・労働組合）によって分析した。人生満足度については、SWLS の合計点の平均値を一元配置分析で算出し、グループ間の比較を行った。

### １）回答者の属性

表１は、各年齢グループの属性を示す。サブサンプル全体の平均年齢は69.4歳で、グループ別平均をみると、後期中年者が60.0歳、前期高齢者は69.0歳、中・後期高齢者は80.9歳であり、グループ間に有意差が見られた（$p$ <.0001）。回答者の性別は、後期中年者、前期高齢者、中・後期高齢者とも、男性より女性が多く、女性の割合はそれぞれ63.1％、59.1％、58.9％といずれも過半数を占めていた。学歴は、大学あるいは大学院の修了者が総体の50.1％と半数を占めた。グループ別にみると、大学・大学院卒業率は後期中年者が55.6%、前期高齢者が51.5%、中・後期高齢者が40.6% と、中・後期高齢者の卒業率が最も低かったが、高校卒業率では、後期中年者が16.0%、前期高齢者が32.7%、中・後期高齢者が33.3% であり、中・後期高齢者の割合が最も高く、後期中年者の率が最も低いという有意差が見られた（$\chi^2$ = 31.20, $df$ = 4, $p$ <.0001）。有意差が確認された世帯収入（$\chi^2$ = 52.83, $df$ = 6, $p$ <.0001）では、1,000万円以上の収入を得ている世帯の割合が最も多かったのは後期中年者（37.2％）で、前期高齢者は20.1％、中・後期高齢者では11.1％と、年齢が上がるにつれ減少した。一方、300万円未満では、中・後期高齢者が33.2％、前期高齢者25.6％、後期壮年者が16.1％と、収入の最も低い世帯の割合は、年齢の高いグループが高かった。同居者については全体的に70.6％が「あり」と回答し、一人暮らしをしている回答者は中・後期高齢者（36.1％）に最も多くみられた（後期中年者27.0％、前期高齢者26.2％）（$\chi^2$ = 6.78, $df$ = 6, $p$<.05）。持ち家率にグループ間で有意差は見られなかったが、

中・後期高齢者が81.4％と最も高く、前期高齢者は77.9％、後期中年者は75.5％であった。港区在住年数は、中・後期高齢者（41.9年）が最も長かった（後期中年者25.1年、前期高齢者34.3年、$p$ <.0001）。また、港区は外国人居住者の多い区であるが､外国籍をもつ回答者はみられなかった。

### ２）地域社会とのつながり

表２は、地域社会とのつながりを社会参加とソーシャルサポートの側面から分析した結果を報告する。こちらも、一元配置分析（話し相手の人数）および$\chi^2$検定（ボランティア活動、趣味・稽古、スポーツ、学習、コミュニティ活動、政党・労働組合）を用いて分析した。なお、社会参加の変数については、欠損値が多く、参加は参加として回答されることが明らかであるため、欠損値は不参加として扱った。

グループ間の有意差は見られなかったものの、各グループとも趣味と稽古のサークル・団体への参加が最も多く（後期中年者40.5％、前期高齢者43.3％、中・後期高齢者36.1％）、続いてスポーツへの参加が多かった（後期中年者30.2％、前期高齢者28.0％、中・後期高齢者26.0％）。有意差がみられた学習活動への参加については後期中年者（19.4％）が最も多く、中・後期高齢者（9.1％）が最も低かった（$\chi^2$=9.90, $df$ = 2, $p$ <.01）。コミュニティ活動については前期高齢者の参加が最も多く（36.0％）、後期中年者が最も少なかった（25.1％）（$\chi^2$=7.21, $df$ = 2, $p$ <.05）。政党・労働組合への参加は少ないものの、後期中年者の参加が最多（5.6％）で、前期高齢者の参加率は最も少なかった（1.8％）（$\chi^2$ =6.77, $df$ = 2, $p$ <.05）。ボランティア活動についてはグループ間の有意差は見られず、参加率も全体的に7.5％と低い。話し相手は、前期高齢者が5.7人と最も多く、続いて後期中年者（5.1人）、中・後期高齢者（3.5人）の順となった（$p$ <.001）。

### ３）人生満足度

人生満足度については一元配置分析で年齢別グループ比較を行い、表３に報告した。この分析モデルではグループ間に統計学的な有意差がみられ、後期中年者（21.5）と前期高齢者（21.2）にはほとんど相違はないものの、中・後期高齢者は３つのグループのなかで最も高い満足度（23.3）を示した（$p$ <.001）。結果、各グループは、人生に「やや満足」している状態であった。

### ４）人生満足度の予測要因

表４は、年齢グループ別の重回帰分析によって人生満足度を予測する要因（属性と地域社会とのつながり）を分析した結果を表している。分析の結果、後期中年者、前期高齢者、中・後期高齢者の３つのグループに部分的に共通する変数はあるものの、全グループに共通する変数はみつからなかった。後期中年者の人生満足度を予測する要因は、世帯収入（Beta = .18, $p$ < .05）、持ち家（Beta = .14, $p$ < .05）、趣味と稽古（Beta = .19, $p$ < .05）であった。前期高齢者については、持ち家（Beta = .16, $p$ < .05）のみが人生満足度を有意に予測した。一方、中・後期高齢者の人生満足度は、世帯収入（Beta = .20, $p$ < .05）と趣味と稽古（Beta = .23, $p$ < .05）に有意に関係した。

後期中年者、前期高齢者、中・後期高齢者の３つ重回帰モデルの分散をみると、前期高齢者モデルは人生満足度の32.6％（調整済み $R^2$ = .05、F=2.41、$p$ < .01）を説明するが、後期中年者モデルは13.5％（調整済み $R^2$= .08､F=1.79、$p$ < .05）であった。中・後期高齢者モデルについては12.3％であり、統計的に有意なモデルとはならなかった。

**表１　年齢グループ別属性（N＝746、一元配置分析および$\chi^2$検定）**

| | 後期中年者<br>（55－64歳）<br>n=252 | 前期高齢者<br>（65－74歳）<br>n=275 | 中・後期高齢者<br>（75－99歳）<br>n=219 | 合計<br>（55－99歳）<br>N =746 |
|---|---|---|---|---|
| | 平均値（標準偏差）**** | | | |
| 年齢 | 60.0（2.79）[a] | 69.0（2.80）[b] | 80.9（4.75）[c] | 69.4（8.98） |
| | %（n） | | | |
| 性別 | | | | |
| 男性 | 36.9　（n=93） | 40.9（n=112） | 41.1　（n=90） | 39.6（n=295） |
| 女性 | 63.1（n=159） | 59.1（n=162） | 58.9（n=129） | 60.4（n=450） |
| 国籍 | | | | |
| 日本 | 100.0（n=252） | 100.0（n=275） | 100.0（n=219） | 100.0（n=746） |
| その他 | 0.0　（n= 0 ） | 0.0　（n= 0 ） | 0.0　（n= 0 ） | 0.0　（n= 0 ） |
| 学歴 **** | | | | |
| 高校卒業 | 16.0　（n=39） | 32.7　（n=85） | 33.3（n=60） | 26.9（n=184） |
| 高等専門学校・専門学校・短大卒業 | 28.4　（n=69） | 15.8　（n=41） | 26.1（n=47） | 23.0（n=157） |
| 大学・大学院卒業 | 55.6（n=135） | 51.5（n=134） | 40.6（n=73） | 50.1（n=342） |
| 世帯収入 **** | | | | |
| 300万円未満 | 16.1（n=39） | 25.6（n=65） | 33.2（n=63） | 61.5（n=134） |
| 300－500万円未満 | 19.0（n=46） | 26.0（n=66） | 31.1（n=59） | 24.9（n=171） |
| 500－1000万円未満 | 27.7（n=67） | 28.3（n=72） | 24.7（n=47） | 27.1（n=186） |
| 1000万円以上 | 37.2（n=90） | 20.1（n=51） | 11.1（n=21） | 23.6（n=162） |
| 生活形態 * | | | | |
| 同居者あり | 73.0（n=184） | 73.8（n=203） | 63.9（n=140） | 70.6（n=527） |
| 独り暮らし | 27.0　（n=68） | 26.2　（n=72） | 36.1　（n=79） | 29.4（n=219） |
| 持ち家 | | | | |
| 持ち家 | 75.5（n=188） | 77.9（n=212） | 81.4（n=171） | 78.1（n=571） |
| 賃貸・社宅・その他 | 24.5　（n=61） | 22.1　（n=60） | 18.6　（n=39） | 21.9（n=160） |
| | 平均値（標準偏差）**** | | | |
| A区在住年数 | 25.1（19.15）[a] | 34.3（21.69）[b] | 41.9（23.63）[c] | 33.4（22.46）[a] |

注：平均値間の有意差は一元配置分析を用いて分析した。****$p$ < .0001.　異なる文字のある平均値間に p<.05のレベルで有意差がみられる。たとえば、平均値[a] と平均値[b] および平均値[c] の間には有意差がある。
割合間の有意差は$\chi^2$検定を用いて分析した。*$p$ < .05, ****$p$ < .0001.

**表２　社会参加とソーシャルサポート（N=746、一元配置分析および$\chi^2$検定）**

| | 後期中年者<br>（55－64歳）<br>n=252 | 前期高齢者<br>（65－74歳）<br>n=275 | 中・後期高齢者<br>（75－99歳）<br>n=219 | 合計<br>（55－99歳）<br>N=746 |
|---|---|---|---|---|
| 社会参加 | | % （n） | | |
| ボランティア活動 | 6.3 （n=16） | 8.7 （n=24） | 7.3（n=16） | 7.5 （n=56） |
| 趣味・稽古 | 40.5（n=102） | 43.3（n=119） | 36.1（n=79） | 40.2（n=300） |
| スポーツ | 30.2 （n=76） | 28.0 （n=77） | 26.0（n=57） | 28.2（n=210） |
| 学習 ** | 19.4 （n=49） | 15.6 （n=43） | 9.1（n=20） | 15.0（n=112） |
| コミュニティ活動* | 29.0 （n=73） | 36.0 （n=99） | 25.1（n=55） | 30.4 （n=227） |
| 政党・労働組合* | 5.6 （n=14） | 1.8 （n=5） | 2.3 （n=5） | 3.2 （n=24） |
| ソーシャルサポート | | 平均値（標準偏差）*** | | |
| 話し相手の人数 | 5.1（4.38）[a] | 5.7（7.67）[a,b] | 3.5（3.05）[c] | 4.8（5.60） |

注：平均値間の有意差は一元配置分析を用いて分析した。***$p$ < .0001.　異なる文字のある平均値間に p<.05のレベルで有意差がみられる。たとえば、平均値[a] と平均値[b] および平均値[c] の間には有意差がある。
割合間の有意差は$\chi^2$検定を用いて分析した。*$p$ < .05, **$p$ < .01.

**表３　人生満足度（N=746、一元配置分析）**

| | 後期中年者<br>（55－64歳）<br>n=252 | 前期高齢者<br>（65－74歳）<br>n=275 | 中・後期高齢者<br>（75－99歳）<br>n=219 | 合計<br>（55－99歳）<br>N=746 |
|---|---|---|---|---|
| | | 平均値（標準偏差）*** | | |
| 人生満足度 | 21.54（5.84）[a] | 21.21（6.56）[a] | 23.26（7.29）[b] | 21.83（6.55） |

注：平均値間の有意差は一元配置分析を用いて分析した。***$p$ < .001.　異なる文字のある平均値間に p<.05のレベルで有意差がみられる。たとえば、平均値[a] と平均値[b] および平均値[c] の間には有意差がある。

**表４　人生満足度の予測要因（N＝746、重回帰分析）**

| 独立変数 | 後期中年者（55－64歳）n=252 | | 前期高齢者（65－74歳）n=275 | | 中・後期高齢者（75－99歳）n=219 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | *b*（*標準誤差*） | Beta | *b*（*標準誤差*） | Beta | *b*（*標準誤差*） | Beta |
| 属性 | | | | | | |
| 性別 | .58（.92） | .05 | －1.00（1.11） | －.08 | .29（1.71） | .02 |
| 学歴 | .68（.60） | .09 | .27（.62） | .04 | 1.31（.92） | .15 |
| 世帯収入 | .96（.42）* | .18 | 1.43（.71） | .20 | 1.43（.71）* | .20 |
| 一人暮らし | .59（95） | .05 | .69（1.13） | .05 | 1.18（1.52） | .08 |
| Ａ区在住年数 | －.02（.02） | －.07 | －.02（.02） | －.06 | －.01（.03） | －.04 |
| 持ち家 | 1.85（.93）* | .14 | 2.50（1.20）* | .16 | 1.75（1.70） | .09 |
| 社会参加とソーシャルサポート | | | | | | |
| 趣味と稽古 | 2.20* | .19 | .19（1.01） | .01 | 3.42（1.57）* | .23 |
| スポーツ | －1.55（.91） | －.12 | .51（1.08） | .04 | －1.28（1.75） | －.08 |
| 学習 | .07（1.06） | .00 | 1.05（1.30） | .06 | －3.21（2.45） | －.13 |
| 政党・労働組合 | 2.31（1.83） | .09 | －.20（3.56） | －.00 | －5.84（4.3） | －.12 |
| ボランティア | －1.32（1.64） | －.06 | 2.91（1.74） | .13 | 1.13（2.70） | .04 |
| コミュニティ活動 | .00（.92） | .00 | －.34（.96） | －.03 | .27（1.58） | .02 |
| 話し相手の人数 | .11（.09） | .08 | .04（.04） | .04 | －.10（.21） | －.04 |
| $R^2$ | .135** | | .326* | | .123 | |
| 調整済み $R^2$ | .08 | | .05 | | .03 | |

*$p < .05$、**$p < .01$。

## ５．ウェルビーイングとその予測要因に関する考察

人々は高齢化のなかで様々な後退や喪失を経験し、死が身近な課題になってくることから、心理的なウェルビーイングは一般的に減退すると考えられている（Fung, 2005; Moos, Brenman, Schutte, & Moos, 2006）。本研究では、人生満足度は、後期中年者、前期高齢者、中・後期高齢者の各グループとも「やや満足（範囲＝21～25）」と回答していた。なかでも、75歳以上の中・後期高齢者（平均値＝23.26）は、後期中年者（平均値＝21.54）と前期高齢者（平均値＝21.21）に比較して、若干であるが高い満足度を示していた。一方、後期中年者と前期高齢者を比較すると、後期中年者の方がやや高い数値を示したものの、その差はごくわずかで、両グループの人生満足度はほぼ変わらなかった。こうした結果は、高齢となってもウェルビーイングを維持あるいは高めることが可能であることを示唆している。先行研究では、幸福、人生満足度、抑うつ感など様々な指標を用いて高齢者のウェルビーイングが研究されてきたが、その結果も様々である。例えば、Yang（2008）の研究では年齢はウェルビーイングにポジティブに作用したが、Bennet（1997）の研究ではネガティブな影響が発見された。そのほか、Akashi（2012）およびJopp・Rott（2006）などの研究では、ウェルビーイングに対する年齢の完全に

有意な効果はみられなかった。こうした相違は、多元的な概念であるウェルビーイングに対して、それぞれの研究者がそれぞれの尺度を用いて測定していること、また、研究によって調査対象の年齢が相違することなどに起因すると考えられる。このことは、今後、前期高齢者、中期高齢者、後期高齢者など、高齢期の年齢別グループのウェルビーイングについて標準尺度を用いた研究をさらに進めていく必要性を示唆している。

次に人生満足度の予測要因であるが、後期中年者、前期高齢者、中・後期高齢者の重回帰分析モデルのうち、中・後期高齢者モデルは統計学的に有意とならなかったことに留意して考察を進める必要がある。グループ別重回帰分析を行ったところ、後期中年者、前期高齢者、中・後期高齢者の３つの年齢別グループすべてに共通する予測要因はみつからなかった。55～64歳の後期中年者の人生満足度を予測する要因は、世帯収入、持ち家、趣味と稽古であった。世帯収入が高いこと、居住する住宅形態が持ち家であること、趣味と稽古のサークル・団体に参加していることが、満足度の高さを説明した。一方、65～74歳の前期高齢者については、持ち家であることのみが高い人生満足度を予測した。75～94歳の中・後期高齢者モデルは有意でなかったが、世帯収入と趣味と稽古に参加していることが満足度の高さにつながった。

本研究では、人生満足度を説明する独立変数を調査対象の属性と地域社会とのつながりに分類して分析したが、属性としては学歴や性別は人生に対する満足度を左右する要因とはならず、持ち家、世帯収入という生活を安定させるための基盤が人生を満足に感じさせる重要な要因であることがわかった。特に現役世代を含む後期中年者は、退職後の生活に向けた準備段階ともいえ、そのなかで住居を保有していること、収入が十分であることは、定年後の人生設計をするなかで重要な要件となるのであろう。こうした結果は、老後の生活基盤を整えるための計画、備えの重要性を示唆する。前期高齢者は持ち家のみが有意な説明要因となった。この期にある人々は、収入については年金を受給することで経済的な生活基盤を得ることができる。持ち家であることで家賃などの大きな出費を避けられることができれば、人生満足度にも影響すると考えられる。

地域社会とのつながりであるが、これは社会参加とソーシャルサポートで測定した。社会参加の形態としては、趣味と稽古、スポーツ、学習、政党・労働組合、ボランティア、コミュニティ活動と人生満足度の関係を分析したが、このなかで有意な関係がみられたのは、後期中年者と中・後期高齢者（重回帰分析モデルは有意でない）の趣味・稽古のサークル・団体への参加のみであった。本研究では、ボランティア活動およびコミュニティ活動への参加は、人生満足度を予測する結果とならなかった。ボランティア活動への参加と高齢者のウェルビーイングにはポジティブな関係があることが多くの研究で証明されている（Greenfield & Marks, 2004; Morrow-Howell, Hinterlong, Rozario, & Tang, 2003）。本研究で有意な関連が認められなかった理由として、ボランティア活動を、高齢者のためのボランティアと児童のためのボランティアに限定したことも考えられるが、必ずしもボランティアが高齢者のウェルビーイングにつながるとは言えないことを喚起ししている。Akashi（2012）は、米国の中年者（50～64歳）、前期高齢者（65～74歳）、中・後期高齢者（75歳～）の研究の中で、中期高齢者のボランティア活動への参加は、幸福感にマイナスに作用することを発見した。趣味と稽古への参加が人生満足度にポジティブに関連していることと合わせて考え

ると、今後、高齢化が進展する社会において、社会参加の選択肢を増やし、高齢者が自らの状態と関心に沿って選択できる社会参加の機会を幅広く提供していくことが需要であると考える。また、ソーシャルサポートであるが、本研究では、ソーシャルサポートを悩みやグチを話せる相手の人数として測定した。本研究では有意な結果は得られなかったが、これまでの先行研究のなかで、高齢者のウェルビーイングとソーシャルサポートの関係性は認められていることから（Beekman, Beurs, Balkom, Deeg, Dych, & Tilburg、2000; Oxman & Hull, 2001）、今後、ソーシャルサポートについてさらに詳細な研究が望まれる。

前述のように、高齢者の人生満足度について、本研究での重回帰分析モデルの説明力は高いとはいえない。これには、本研究が地域社会とのつながりから高齢者のウェルビーイングを考えることを目的にしており、健康に関する分析を含んでいなかったことが影響したと考えられる。健康指標をコントロールしたうえで社会とのつながりと高齢者のウェルビーイングを探求していくことを、今後の研究課題として挙げる。

## 6．結論

高齢者人口が2035年には３人に１人（33.4％）、2060年には2.5人に１人（39.9％）（国立社会保障・人口問題研究所、2012）と予測される超高齢化社会の日本では、高齢者数の増加への対応のみならず、長くなった高齢者の生活の質にも着目していく必要がある。本研究でも、高齢となっても人々はウェルビーイングを維持、あるいは高めていくことが可能であることが分析された。ウェルビーイングに関連する要因は、後期中年者については世帯収入、持ち家、趣味・稽古、前期高齢者では持ち家、中・後期高齢者では、世帯収入と趣味・稽古であった。本研究では、地域社会とのつながりがウェルビーイングに大きく貢献するという結果は得られなかったが、趣味・稽古は参加者数でみても最多であった。今後、それぞれの関心によって参加を選択できる機会を増やしていくことが、高齢者のウェルビーイングにつながっていくと考えられる。信頼性と正当性が確認された尺度を用いて、何が高齢者のウェルビーイングを形成していくのか、今後、研究を重ね、高齢者のクオリティライフを増進していく政策やプログラムを開発していく必要がある。

【参考文献】

Akashi, R. A.（2012）. *Psychological well-being among three age groups of older Americans living in the community*. Unpublished Dissertation, Columbia University School of Social Work, New York.

Beekman, A. T. F., Beurs, E. D., van Balkom, A. J. K. M., Deeg, D. J. H., van Dych, R., & van Tilburg, W.（2000）. Anxiety and depression in later life: Co-occurrence and communality of risk factors. *The American Journal of Psychiatry, 157*, 89-95.

Benneett, K. M.（1997）. A longitudinal study of wellbeing in widowed women. *International Journal of Geriatric Psychiatry, 12*, 61-66.

Chen, C.（2001）. Aging and life satisfaction. *Social Indicators Research, 54*, 57-79.

Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S.（1985）. Satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment, 49,* 71-75.

Freund, A. M., & Ebner, N. C.（2005）. The aging self: Shifting from promoting gains to balancing losses. In W. Greve, K. Rothermund & D. Wentura（Eds.）, *The adaptive self: Personal continuity and intentional self-development*. Cambridge: MA: Hogrefe & Huber Publishers.

Fung, H. H.（2005）. Reactive and proactive motivational changes across adulthood. In W.

Greve, K. Rothermund & D. Wentura (Eds.), *The adaptive self: Personal continuity and intentional self-development*. Cambridge: MA: Hogrefe & Huber Publishers.

Greenfield, E. A., & Marks, N. F. (2004). Formal volunteering as a protective factor for older adults' psychological well-being. *The Journals of Gerontology, 59B* (5), S258-S264.

Hillerås, P. K., Aguero-Torres, H., & Winblad, B. (2001). Factors influencing well-being in the elderly. *Current Opinion in Psychiatry, 14*(4), 361-365.

Jopp, D., & Rott, C. (2006). Adaptation in very old age: Exploring the role of resources, beliefs, and attitudes for centenarians' happiness. *Psychology and Aging, 21* (2), 266-280.

Khalil, S. L., & Okun, M. A. (2002). Subjective well-being. In D. J. Ekerdt (Ed.), *Encyclopedia of aging* (Vol. 4, pp. 1368-1370). Farming Hills, MI: Macmillan Reference USA.

国立社会保障・人口問題研究所. (2012). 日本の将来推計人口. In. 東京: 国立社会保障・人口問題研究所.

Masoro, E. J. (2001). "Successful aging" - useful or misleading concept? *The Gerontologist, 41* (3), 415-418.

Moos, R. H., Brennan, P. L., Schutte, K. K., & Moos, B. S. (2006). Older adults' coping with negative life events: Common processes of managing health, interpersonal, and financial/work stressors. *The International Journal of Aging and Human Development, 62* (1), 39-59.

Morrow-Howell, N., Hinterlong, J., Rozario, P. A., & Tang, F. (2003). Effects of volunteering on the well-being of older adults. *The Journals of Gerontology, 58B* (3), S137-S145.

Oxman, T. E., & Hull, J. G. (2001). Social support and treatment response in older depressed primary care patients. *Journal of Gerontology B: Psychological Science and Social Science, 56*, 35-45.

Pavot, W., & Diener, E. (2003). Well-being (including life satisfaction). In R. Fernandez-Ballesteros (Ed.), *Encyclopedia of psychological assessment* (Vol. 2, pp. 1097-1101). London: SAGE Publications.

Pinquart, M., & Sörensen, S. (2001). Gender differences in self-concept and psychological well-being in old age: A meta-analysis. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences, 56B* (4), 195-213.

Qualls, S. H., & Abeles, N. (2000). Psychology and the aging revolution. In S. H. Qualls & N. Abeles (Eds.), *Psychology and the aging revolution: How we adapt to longer life*. Washington, DC: American Psychological Association.

Smith, J., & Baltes, M. M. (1998). The role of gender in very old age: Profiles of functioning and everyday life patterns. *Psychology and Aging, 13* (4), 676-695.

総務省統計局. (2013). 統計からみた我が国の高齢者（65歳以上）―「敬老の日」にちなんで. *統計トピックス* (72).

Westerhof, G. J., & Barrett, A. E. (2005). Age identity and subjective well-being: A comparison of the United States and Germany. *The Journals of Gerontology, 60B* (3), S129-S136.

Yang, Y. (2008). Social inequalities in happiness in the United States, 1972-2004: An age-period-cohort analysis. *American Sociological Review, 73* (2), 204-226.